人類の英知を未来へ繋ぐ
―慶應義塾図書館開館 100 年記念展の開催

倉持（くらもち）　隆（たかし）
（三田メディアセンター）

はじめに

100 年記念展示は 2012 年 8 月 29 日（水）より 10 月 13 日（土）まで，図書館 1 階展示室において開催となった。展示会名は図書館旧館の大時計にちなんで「TEMPUS FUGIT　―時は過ぎゆく―　慶應義塾図書館開館 100 年記念展」（以下「100 年記念展」とする）とし，図書館に関する資料を紹介してその歴史をひもとくとともに，所蔵する重要文化財と貴重書を 3 期に分けて展示した。

加えて，今回は特別に展示室入口右側の壁一面に写真を見ながら図書館 100 年の歴史を振り返ることができる大きな年表パネルを制作した。

展示準備はプロジェクトチーム（5 名）が担当した。基本的な作業は年表パネル 2 名，図書館関係資料 1 名，貴重書展示 2 名の担当者が分担し，全体的な方針の策定や図録の解説執筆などは 5 名全員で行った。2011 年 5 月よりプロジェクトを開始し，約 1 年 3 ヶ月間の準備期間を経て開催日を迎えた。

1　「慶應義塾図書館の歴史」年表パネル

年表パネルには「慶應義塾図書館の歴史」「歴代館長」「蔵書となった主なコレクション」「その他の出来事」の項目を設け，写真を織り交ぜながら，図書館 100 年の歴史を紹介した。この年表で特徴的なのは，全体を大きく 3 期に分けたこと，歴代館長をすべて写真入りで紹介したこと，蔵書となった主なコレクションを受入年代で時系列に並べたことの 3 点であろう。時代区分は「図書館誕生」（1858～1944）「戦後の復興と成長」（1945～1981）「未来を先導する図書館」（1982～）の 3 期で，それぞれ親しみやすいリード文を加えることによって，長い歴史の全体像を把握しやすいようにした。歴代館長の 19 代に及ぶ写真は図書館 100 年の歴史を実感させるものとなった（次頁参照）。「蔵書となった主なコレクション」を項目として盛り込んだのは，展示のコンセプトとして蔵書構築の歴史にスポットを当て，年表と展示資料とのリンクを重要な要素と捉えたことによる。年表に登場する資料やコレクションを展示する際，年表パネルに展示番号を貼り，展示との関連性を持たせる工夫も行った。その他，年表に登場する建物や刊行物，主なコレクションの寄贈者・旧蔵者など，写真を可能な限り掲載した。『慶應義塾図書館史』（1972 年刊）『慶應義塾図書館史稿―1970–2012』（2012 年刊）に掲載された年表を元にした記載事項の選別と表現の統一，画像の収集など年表担当者の苦心は最後まで続いたが，デザインを依頼した印刷会社からも協力を得て，最終的には色彩豊かでデザイン性も兼ね備えた斬新な年表に仕上がったのではないかと考えている。

2　図書館関係資料（通期展示）

全会期を通じて展示した図書館関係資料は，重要文化財附指定であるステンドグラス原画とその下絵にあたる原画習作を中心とし，福澤研究センターの協力を得て次のような資料を展示した。昭和 20 年の空襲で焼失した時のステンドグラスの破片，ステンドグラス請負契約書並立替金引去証書，『慶應義塾創立五十年紀念圖書館建設趣意書』，武藤山治，徳川頼倫から図書館への寄付書，『図書館電燈器具制作取付契約書および追加契約書』に含まれるシャンデリアの青焼きデザイン画などである。これらは図書館建設やステンドグラス制作に関係が深い資料である。

「月波楼」の扁額も展示した。これは鎌田栄吉元塾長（塾長在任：1898～1922，号・竹堂）筆によるもので，2010 年に修復した後，館長室に掲げられていたものである。「月波楼」はもともと三田の島原藩中屋敷の一隅にあった当時としては珍しい 3 階建ての建物で，天保年間の『江戸名所図会』にも記載されていたが，明治 4 年（1871）慶應義塾が移転した後，この「月波楼」に学生に貸与する図書を置いたことから，慶應義塾図書館の起源とも言われている。それゆえ創立五十年を記念して建てられた図書館の最

も高い位置にあたる八角塔の最上層も「月波楼」と名づけられていた。まさに「100 年記念展」に相応しい資料であり，展示室奥の一番目立つ部分に掲げることにしたが，この扁額によって展示室の雰囲気が引き締まるとともに，ぐっと趣深いものとなり，その他の展示を引き立てる効果ももたらした。

この他，慶應義塾図書館の長い歴史を物語るめずらしい資料も紹介した。さまざまな蔵書票を貼付した『慶應義塾図書館用レッテル帖』，蔵書印を集めた『慶應義塾図書館蔵書印譜』の 2 冊はいずれも大正～昭和初期に郷土史研究で名を馳せた庄内出身の図書館員・国分剛二が 1940 年頃に編集したものである。記念メダルも 2 種類出品した。東京美術学校出身でヨーロッパに留学して薄肉彫を研究した畑正吉作の「創立五十年紀念図書館開館記念章牌」と昭和 49 年のステンドグラス修復を記念して作成された七宝焼きのメダル「図書館大時計」である。また，現在の図書利用券にあたる大正期の「借覧券」や戦前・戦後の各種入館券など，実用的な資料も展示した。これらの展示資料の前では見学者から懐かしむ声があがっていたのが印象的であった。

また，展示室の外には木製の目録ケースに入れたカード目録を置き，かつて主流であったカードによる資料検索を体験できるコーナーも設けた。

3　貴重書展示

今回の展示の会期は 8 月末の私立大学図書館協会総会・研究大会にあわせて開始した後，10 月中旬までの長期間にわたる会期を設定したため，貴重書については資料保存の観点から会期中 2 回の展示替えを行い，内容を 3 期に分けることとなった。所蔵する多数の貴重書・コレクションを，慶應義塾図書館ならではの特色を生かしながら，しかも 3 期に自然な流れを持たせて展示することを念頭に検討を重ね，次のような内容で展示を行うことに決まった。なお，本展示ではテーマごとに各展示資料に解説を加えた図録を作成したため，詳細はそちらに譲ることとし，ここでは概略のみを述べる。

歴代館長

田中 一貞
（1905～1921）

占部 百太郎
（1921～1924）

小泉 信三
（1924～1933）

高橋 誠一郎
（1933～1944）

野村 兼太郎
（1944～1958）

高村 象平
（1958～1960）

前原 光雄
（1960～1965）

佐藤 朔
（1965～1969）

高鳥 正夫
（1969～1982）

大江 晁
（1982～1985）

速水 融
（1985～1987）

清水 龍瑩
（1987～1991）

倉澤 康一郎
（1991～1993）

内池 慶四郎
（1993～1997）

藤井 彌太郎
（1997～2000）

飯田 裕康
（2000～2001）

細野 公男
（2001～2005）

杉山 伸也
（2005～2009）

田村 俊作
（2009～）

展示風景

I 期　貴重書今昔（8 月 29 日～9 月 12 日）

慶應義塾図書館が貴重書の選定基準を定めた昭和 20 年代に収蔵された初期の資料と今年度・昨年度に受け入れた新規収蔵の資料を展示して貴重書コレクション構築の歴史を辿る。ここでは特に新規収蔵の「ヘブル語聖書トーラー写本およびケース」が注目を集めた。

II 期　塾員・館長によるコレクション（9 月 13 日～29 日）

慶應義塾図書館の蔵書構築の礎をなした塾員による寄贈資料，熱意を持って個性ある視点で資料収集に努めた田中一貞や野村兼太郎など，館長によるコレクションを展示し，荒俣宏博物誌コレクション，反町十郎収集の武家文書，政治家星亨の旧蔵書等を紹介した。

III 期　人類の英知を未来へ繋ぐ（10 月 1 日～13 日）

コペルニクス，ガリレオなどの科学史コレクション，グーテンベルク聖書（零葉，断簡）など，古典として長く読み継がれる，未来へ伝えていくべきコレクションを展示した。

なお，重要文化財については指定順に 3 期に分けて所蔵する 5 件すべてを展示した。

展示図録は，年表パネル制作と同じ印刷会社にデザイン段階から依頼し，20 ページオールカラーで画像を多数盛り込んだ冊子を作成した。解説文は参考資料をもとにプロジェクトメンバー全員が分担して執筆し，学部生や一般の方にもわかりやすい平易な内容を目指し，分量も抑えて読みやすい解説を心がけた。専門性の高い資料を短い文章でわかりやすく解説することは予想以上に難しく，資料によっては何度となく書き直しを行ったが，最終的には「100 年記念展」の記録の一端として残せるものに仕上がったのではないかと思う。

おわりに

「100 年記念展」の準備は，年表，図書館関係資料，貴重書展示，そのいずれにおいても，慶應義塾図書館の歴史を振り返りこれまでの図書館の歩みを再確認する作業であった。そこで感じたことは記録や保存の重要性である。特に図書館関係資料においては，現物はあるが詳細がわからないために展示できない資料がある一方で，国分剛二が編集した資料のように記録があるお蔭で興味深い展示品となった例もあった。国分のように私たち現代の図書館員も 50 年後 100 年後のために的確な情報を残していかなければならない。「100 年記念展」は私たち図書館員自身の現在の仕事を見つめなおす機会となった。

3 期にわたる大規模な貴重書展示を可能にしたのは，2011 年 10 月に新設された展示室の存在であったといえる。特にこれまで安全性や資料保存の面での不安から館内展示を控えてきた重要文化財について，5 件すべてを展示できたことは「100 年記念展」の内容をより充実したものにしたといえよう。今後も展示室の特性を十分に生かし，積極的に蔵書の紹介をしていく必要があろう。

「100 年記念展」の最後を締めくくるⅢ期のテーマは「人類の英知を未来へ繋ぐ」であった。これは，慶應義塾図書館が所蔵する貴重書やコレクションはこれまで人類が築き上げてきた文化的遺産と呼べるものであり，図書館としての使命はこれらの貴重な資料を広く公開し，研究・教育に生かしながら次世代に守り継いでいく，まさに「知の継承」である，という趣旨で設定されたものである。振り返って考えると，今回の「100 年記念展」は甚だ微力ではあるが，この「知の継承」につながる作業であったと言えるのではないか。今後も地道にそして継続的に慶應義塾図書館の歴史，コレクションの奥深さを広く伝えていくことが「知の継承」を果たすため，私たち図書館員に課せられた責務であろう。